

令和元年5月14日現在

機関番号：82619

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2018

課題番号：26300030

研究課題名(和文) ディルムン文明の起源 バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究 -

研究課題名(英文) The Origins of Dilmun: Archaeological Excavations of Burial Mounds in Bahrain

研究代表者

後藤 健 (Gotoh, Takeshi)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・客員研究員

研究者番号：40132758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：ディルムンは、メソポタミアの周辺国の1つであり、前2000年ごろから湾岸の海上交易を独占した王国である。現在のバハレーンが、このディルムンに比定されている。バハレーンでは、ディルムンが登場する以前(前4000年～前2200年)の居住の痕跡が極めて希薄であり、前2200年ごろに大規模な植民があったと推定されている。では、このディルムンを築いた移住者たちは、どこからバハレーンに到来したのか？本研究では、墓制の比較研究からディルムンの起源を研究した。ディルムン最古の古墳群と周辺地域の墓制を比較した結果、ディルムンの系譜は、西アジアの内陸沙漠北部に暮らしたアモリ系遊牧民にたどりつくことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ディルムンは、前2000年～前1700年にかけてメソポタミアとインダス、オマーン半島を結ぶ海洋交易を独占し、繁栄した王国である。本研究以前、ディルムンの人々は東方のイランあるいはオマーンから到来したとする説が一般的であった。しかし、私たちの発掘調査また墓制の比較研究によって、ディルムンの系譜は、西アジア内陸沙漠に暮らしたアモリ系遊牧民にたどれることが判明した。アモリ系遊牧民は、前2200年ごろからメソポタミアに侵入し、バビロンやラルサ、マリなどの有力都市を支配し、自らの王朝を作ったことが知られるが、私たちの研究によって、ディルムンもアモリ人によって打ち立てられた王朝であることが判明した。

研究成果の概要(英文)：Dikumun is a kingdom mentioned in the ancient Mesopotamian texts. This kingdom monopolized the gulf trade between Mesopotamia, Magan and Meluhha and flourished in the early 2nd Millennium BC. Dilmun is currently identified with modern Bahrain however this island was sparsely occupied between 4000 BC and 2200 BC. As a result, it has been argued that a large population immigrated to Bahrain around 2200 BC. The aim of this research is to consider questions regarding the origin of the Dilmunites through a comparative study of the burial traditions in Bahrain and neighbouring regions. In this project, Wadi as Sail, the oldest Dilmunite burial mound field in Bahrain, was intensively researched. Our research revealed that the Dilmunites probably originated from Amorite pastoral nomads who dwelt in the northern deserts of West Asia.

研究分野：考古学

キーワード：ディルムン 古墳 積石塚 遊牧民 アモリ人

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

前4千年紀後半、南メソポタミアに世界最古の文明メソポタミア文明が誕生した。しかし、広大な沖積平野である南メソポタミアには、金属や貴石、木材、石材といった文明生活を営む上で必要な資源が存在せず、こうした資源を周辺地域から入手する必要があった。

ディルムンは、メソポタミアの文献資料に登場する周辺国の1つである。この王国は、とくに前2千年紀前半(前2000年～前1700年)に、メソポタミア文明とオマーン半島のウンム・ン＝ナル文明またインダス文明を結ぶペルシア湾の海上交易を独占し繁栄したことが知られている。

メソポタミアには、ディルムンを経由し、銅や錫、砂金、象牙、カーネリアン、ラピスラズリ、真珠、黒壇など大量の物資が運びこまれていた。いわば物流の面からメソポタミア文明を支えたのが、このディルムンであった。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーン島が、このディルムンに比定されている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、このディルムンの起源を考察することである。バハレーン島では、前4000年から前2200年にかけて、すなわちディルムンが登場する直前の時期の居住の痕跡が極めて希薄である。この時期の集落遺跡は皆無であり、墓に関してもジェムデット・ナスル式の土器を伴った土坑墓がたった1基確認されているに過ぎない。

しかし、前2200年を過ぎると、バハレーン島に集落遺跡が出現するとともに、突如として圧倒的な数の古墳が築造されるようになる。その後、500年の間に築造された古墳の総数は、7万3千基にもものぼる。

このため、多くの研究者が、それまでほぼ無人の土地であったバハレーン島に、前2200年頃に大規模な植民があったと推定している。では、この移住者たち、のちにディルムン文明を築き上げる人々は、どこからバハレーン島に到来したのか?この問いを考古学的に検討することが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究では、バハレーン島内陸部にあるディルムンの人々を葬った古墳群の1つワーディー・アッ＝サイル古墳群の発掘調査を5年間かけて実施し、この古墳群と周辺地域の墓制を比較することによって、上記の問題を検討した。

一般的に、人間集団は自ら持つ墓制に対してはきわめて保守的なため、ある集団の系譜・起源を研究するうえで墓制は最適である。また、ワーディー・アッ＝サイル古墳群は、前2200年頃すなわち植民直後から作られ始めたディルムン最古の古墳群であるため、ディルムンの起源を検討するうえで最適の古墳群である。

### 4. 研究成果

過去の研究では、ディルムンの人々は、東側のイランやオマーン半島から到来したと論じられることが多かった。しかし、墓制から判断する限り、この説を受け入れることはできない。

今回、ディルムン最古の古墳群ワーディー・アッ＝サイル古墳群を調査した結果、ワーディー・アッ＝サイル古墳群と類似した積石塚古墳群が、西アジアの内陸沙漠北部に広く分布していることがわかった。この内陸乾燥沙漠北部に分布する積石塚古墳群は、一般的に遊牧民の墓と考えられており、沙漠に暮らす遊牧民が何らかの理由で遊牧生活を捨て、海を越えて、バハレーン島に移住したと結論付けられた。

さらに、この私たちの仮説を裏付ける文字資料が、近年、新たにバハレーン隊によって発見されている。2016年11月にバハレーン古物博物館総局が行った報道資料によれば、彼らが発掘した前1700年ごろのディルムンの王墓から、楔形文字でディルムン王の名前を刻んだ石製容器の破片が出土したのだ。この石製容器には、「アガラム部族のもの、エンザク神の僕、ヤグリ・イル」と書かれていた。この王名がアモリ系の名前であったことから、この新発見は、現在、学会で大変な注目を集めている。

アモリ人は、メソポタミアの文献資料に登場する南メソポタミアの西方に広がる内陸沙漠北部に暮らしていた遊牧民の名称である。文献資料によれば、前2200年ごろから、このアモリ人は故地である沙漠を捨て、東方の南メソポタミアに侵入し、やがて軍事力を持って、南メソポタミアの本来の住人であるシュメール人やアッカド人を押さえこみ、有力都市の支配者層を形成するようになる。例えば、ハンムラビ法典で有名なバビロンのハンムラビ王(在位期間:前1792年～前1750年頃)もアモリ系で、先祖をたどるとこのアモリ人にたどりつくことが知られている。

日本隊の調査、そしてバハレーン隊の調査によって、ディルムンも、内陸沙漠北部からやってきた遊牧民とくにアモリと呼ばれた遊牧民によって打ち立てられた王朝であることが明らかになりつつある。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7件)

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、岡崎健治、堀岡晴美、原田怜、間舎裕生、山口莉歩、古代ディルムン王国の起源を求めて - バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2018、第 26 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2019、pp. 71-75

堀岡晴美、マルトゥによるペルシア湾交易参入、西アジア考古学、査読有、19 巻、2018、pp. 17-34

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、原田怜、岡崎健治、渡辺展也、堀岡晴美、古代ディルムン王国の起源を求めて - バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2017、第 25 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2018、pp. 72-76

安倍雅史、ディルムンの起源と専門化、Waseda RILAS Journal、査読無、5 巻、2017、pp. 482-484

安倍雅史、上杉彰紀、西藤清秀、後藤健、ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜、西アジア考古学、査読有、18 巻、2017、pp. 1-15

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、濱崎一志、吉村和久、岡崎健治、堀岡晴美、鈴木崇司、成田竣、古代ディルムン王国の起源を求めて - バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2016、第 24 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2017、pp. 94-99

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、原田怜、濱崎一志、吉村和久、岡崎健治、上杉彰紀、杉山拓巳、堀岡晴美、古代ディルムン王国の起源を求めて - バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2015、第 23 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2016、pp. 114-120

〔学会発表〕(計 31件)

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、岡崎健治、古代ディルムン王国の起源を求めて - バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2019 -、第 26 回西アジア発掘調査報告会、2019

Akinori UESUGI, Archaeological Excavations at Wadi al-Sail by the Japanese Mission, 2015-2019, Baharin National Museum Lecture Event, 2019

安倍雅史、ディルムン - メソポタミアとインダスを結んで海洋文明 -、第 3 回西アジア考古学トップランナーズセミナー、2019

後藤健、ペルシア湾の古代文明マガンとディルムン、古代オリエント博物館ナイト講座、2018

安倍雅史、後藤健、西藤清秀、上杉彰紀、堀岡晴美、原田怜、間舎裕生、バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト第 4 次調査の報告、日本オリエント学会第 60 回大会、2018

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、渡辺展也、岡崎健治、堀岡晴美、原田怜、間舎裕生、山口莉歩、バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2018、日本西アジア考古学会第 23 回大会、2018

Masashi ABE, the Origins of Dilmun: Comparative Study of the Burial Traditions in Dilmun and Neighbouring Regions, 6th International Congress of the Society of South Asian Archaeology, 2018

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、原田怜、岡崎健治、渡辺展也、堀岡晴美、古代ディルムン王国の起源を求めて - バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2017、第 25 回西アジア発掘調査報告会、2018

安倍雅史、墓制から見た古代ディルムンの系譜と階層化、第 240 回アナトリア学勉強会、2017

安倍雅史、墓から見たディルムンにおける階層化、日本西アジア考古学会第 22 回大会、2017

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、渡部展也、岡崎健治、堀岡晴美、原田怜、山口莉歩、清水麻里奈、バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト 2017、日本西アジア考古学会第 22 回大会、2017

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、堀岡晴美、原田怜、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト第3次調査の報告、日本オリエント学会第59回大会、2017

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、濱崎一志、吉村和久、岡崎健治、堀岡晴美、鈴木崇司、成田竣、古代ディルムン王国の起源を求めて - パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2015、第24回西アジア発掘調査報告会、2017

安倍雅史、ディルムンの起源と専門化の発展、セミナー「考古学から捉える社会変化 - モノづくりと専門化」、2017

安倍雅史、古代ディルムンの系譜：アモリ人王朝仮説の提唱、セミナー「アラビア半島の遊牧化：調査の現状と課題」、2017

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、堀岡晴美、パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト第2次調査の報告、日本オリエント学会第58回大会、2016

吉村和久、西藤清秀、安倍雅史、日本パハレーン考古学調査団、鮎沢潤、パハレーン島の洞窟、日本洞窟学会大42回大会、2016

安倍雅史、ワーディー・アッ＝サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜、日本西アジア考古学会、2016

後藤健、西藤清秀、安倍雅史、上杉彰紀、濱崎一志、吉村和久、岡崎健治、堀岡晴美、鈴木崇司、成田竣、パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2016、日本西アジア考古学会第21回大会、2016

上杉彰紀、安倍雅史、西藤清秀、後藤健、前3千年期末、パハレーンにおける古墳分布の基礎的研究、日本西アジア考古学会第21回大会、2016

21 後藤健、ディルムンと日本人、セミナー「メソポタミアとインダスのはざまに：古代ディルムンの考古学」、2016

22 安倍雅史、パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト、セミナー「メソポタミアとインダスのはざまに：古代ディルムンの考古学」、2016

23 後藤健、西藤清秀、安倍雅史、原田怜、濱崎一志、吉村和久、岡崎健治、上杉彰紀、杉山拓巳、堀岡晴美、古代ディルムン王国の起源を求めて - パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2015、第23回西アジア発掘調査報告会、2016

24 安倍雅史、葬制から見た古代ディルムンにおける権力の発生、シンポジウム「権力の誕生：儀礼・祭祀からみる古代文明形成の考古学的アプローチ」、2016

25 安倍雅史、古代文明ディルムンの起源を求めて：パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト、早稲田大学考古学会2015年度研究発表会、2015

26 後藤健、西藤清秀、安倍雅史、原田怜、上杉彰紀、堀岡晴美、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト第1次調査の報告、日本オリエント学会第57回大会、2015

27 堀岡晴美、パハレーン・Barbar 神殿内の2つの正方形神殿、ヘレニズム・イスラーム考古学研究会、2015

28 後藤健、西藤清秀、安倍雅史、原田怜、濱崎一志、吉村和久、岡崎健治、上杉彰紀、杉山拓巳、堀岡晴美、パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト2015、日本西アジア考古学会第20回大会、2015

29 安倍雅史、古代ディルムンの起源を求めて - パハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト、岡山市立オリエント美術館特別講演会、2015

30 安倍雅史、パハレーン王国における文化遺産保護国際協力、文化遺産国際協力コンソーシアム第24回西アジア分科会、2015

31 堀岡晴美、MAR.TU/amurru によるデイルムンへの進出、日本西アジア考古学会大 19 回大会、2014

〔図書〕(計 4 件)

後藤健、筑摩書房、メソポタミアとインダスのあいだ：知られざる海洋の古代文明、2015、292

野口淳、安倍雅史（編著）、新泉社、イスラームと文化財、2015、297

後藤健、高志書院、「アラビア湾岸古代文明の「王墓」」『アジアの王墓』、2014、161-189

原田怜、新泉社、「湾岸産油国の文化遺産保護」『イスラームと文化財』、2015、112-125

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：西藤清秀

ローマ字氏名：Kiyohide Saito

所属研究機関名：奈良県立橿原考古学研究所

部局名：そのほか

職名：嘱託職員

研究者番号(8桁)：80250372

研究分担者氏名：濱崎一志

ローマ字氏名：Kazushi Hamazaki

所属研究機関名：滋賀県立大学

部局名：人間文化学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00135534

研究分担者氏名：安倍雅史

ローマ字氏名：Masashi Abe

所属研究機関名：東京文化財研究所

部局名：文化遺産国際協力センター

職名：研究員

研究者番号（8桁）：50583308

研究分担者氏名：原田怜

ローマ字氏名：Rei Harada

所属研究機関名：東京藝術大学

部局名：大学院美術研究科

職名：研究員

研究者番号（8桁）：40573001

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。